

金戸の石像・石碑・銅像

金戸の石像と言えば路傍の地藏菩薩を思うが、村には六堂のお堂に八体の地藏菩薩を祀る。そのほかに聖徳太子・釈迦仏・弘法大師を祀るお堂が三堂ある。石碑は六字名号の碑が二基と金戸館跡がある。金銅像に二宮尊徳像と観音像がある。

地藏や金銅像のほかに石像物が神明社に狛犬・灯籠・社標がある。社標は昭和十一年に盛田和三郎が寄進したものであるが、揮毫した吉波彦作は明治九年に福光新町の農家の長男として生まれ、家が火災にあいながらも小学校に三年間学んだだけで奉公に出て苦学を重ねて苦学の末小学校教員となる。明治四二年（一九〇九）砺波中学校（現砺波高校）が設立すると教諭に迎えられる昭和八年には校長となる。そして「不断の



努力」と「質実剛健」を信条として教育に尽くす。また学校教育のみならず社会教育にも力を注ぎ、青年学校や幼稚園経営などの指導にも務めた教育者であった。昭和四〇年に没した。

弘法大師像と聖徳太子像

上金戸橋たもとのお堂は往古から中村道辻にあつたもので、本尊は弘法大師像である。弘法大師は新しいものは別として城端に数体しか確認されていない。中村道を往来する者が何かの事故で亡くなった供養として建てられたものと推測される。

金戸には大師像として公民館前に聖徳太子がある。奈良時代の聖徳太子は、四八歳の若さで亡くなり、一族もまた断絶の憂き目をみたが、民衆は聖徳太子を熱狂的に支持しこの人物を神格化したのが「太子信仰」である。

この「太子信仰」は、後に平安時代の空海の「大師信仰」と交じって習合し「太子」と「大師」の区別が曖昧になってきた。

太子は皇子であるが、大師は国から



授けられた大師号からきている。空海が大師号を授かり弘法大師となり、親鸞も明治天皇から見真大師号を授かっている。

信仰は王と王子に分けられており、選ばれた公家・武士などの上流階層は王の信仰を持つことがゆるされたが、常民・賤民は王でなくて一段格の低い王子を信じた。王子が太子と結びつき聖徳太子の太子信仰となる。

しかし砺波地方には二四三体が造立されているがほとんどが明治以降であり、往古から太子信仰が流布していたとは思えない。また現存の太子仏の謂われに聖徳太子の遺徳を讃えるものは少なく、慰霊・供養や健康祈願や村人安穩が大半である。

明治以後の建立流行は、明治十二年に瑞泉寺が出火して、本堂・太子堂が全焼した。

当時の経済界は不況で再建の建設費の捻出や経営の助けのために、地方を巡回して太子像の開扉と絵

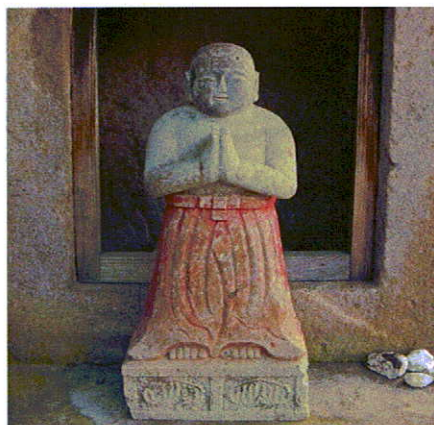


を行うようになった影響といえる。

金戸公民館前の南無太子仏は、上半身裸で腰に赤い袴姿である。高さ約二八cmで幅一〇cm前後で金屋石である。

本堂外壁には発起人宮塚豊正・神本正之・宮本宇之助、敷地寄附人石橋太四郎、本堂寄附人山本仁四郎・盛田喜寿・盛田外喜口とあるが、明治末生まれなので大正頃の造立であろう。

場所は村の中心として役場や学校が立ち始めた時期と重なり、村の安寧を期して分身を迎えたものであろう。



六字名号

松田市次郎の立てた石碑で南无阿弥陀佛の六字名号である。市次郎は三郎右衛門から分家した仁右衛門の長男で、元は西原との村境に家があったが市次郎は北海道へ移民している。基盤整備前は江実宅と町川の間の竹藪にあった。此の地は町川に沿っての野田から細木に続く金沢道につながる道と城

端から立野ヶ原への道の四ツ辻の境目にあたる。

六字名号の右に明治二十丁亥年十一月建立、世話人若連中。左に松田市次郎とある。南砺地方には若連中建立のものが多いと云われるが、市次郎が北海道への移民を記念して若連中が発起し建立したと推測される。



石佛堂

「天保十三年（一八四二）九月十七日勸請し「金戸村里道ノ路傍地藏堂」とある石佛堂が公民館と金戸橋の中間にある。本本尊は釈迦牟尼仏である。明治初期の合祀の際に「差許被成下候様此段奉願上候」と据置の願い県庁に出して許可されている。願いには建物は前口壱尺四寸・奥行壱尺四寸とあるので現在の建物は後世に再建されたものであろう。

敷地は中仙道仁兵衛の持地とある。

また受持を曹洞宗の城端町東下浄国寺住職前田智鈍がしていたと記す。現在は五組が管理している。



日露戦争戦死慰霊碑

専徳寺前の碑は源元伊蔵が日露三万人が激突した奉天大会戦で戦死した慰霊碑である。過去帳には「故陸軍歩兵第二十八連隊第一中隊二等卒源元源宇衛門次男源元伊蔵。右の者露奉天附近に於て明治三十八年三月七日戦死」とある。

日露戦争に従軍した金戸の村人は、神明社春日灯籠碑文に高倉太郎外に東頭亥之助・盛田弥左・梅本五左・山本太佐・松田宗一郎・朝日久太郎・東頭久四郎が従軍している。

